

三尾  
重定  
編輯

新編  
小學讀本  
第七

178  
4  
93

館標書會育教本日大			
三	二		
九册	五號	三架	六函

K120.8  
68a  
7

三尾重定編

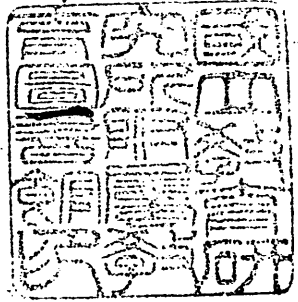
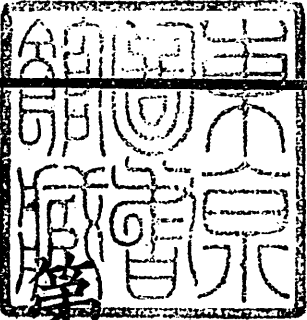
新編小學讀本第七

東京

教育書院藏

明治二十年二月四日内務省交付 1566 第 7 卷

# 新編 小學讀本第七



三尾重定 編

物ふいかならず。務むべきの定規  
あり。犬の夜を守り。鶏の晨と司る  
ま。天然の定めなり。況<sup>テ</sup>や。万物のれ

新編小學讀本

第七

教育書院

いと稱する。人に於てや

幼稚の時に。幼稚のつゞめあり。壯年ふして。壯年の務あり。おいて。又老たるほどの務あり。此務をなさざる者。完全なる人といふべからず

人二貴賤貧富ノ別アレドモ。其家

ヲ治ルニハ。家内和合シテ。各ソノツトムル處ヲ務メザレバ。カナラズ破レ損フモノナリ。是ヲ人ノ身體ニ喩タル。オモシロキ話アリ。余汝ラニ語リキカセン。汝等ヨロシク理會スベシ  
一日。手足集會して曰。我ら終日。困

苦して得る處の食物は。亦少くく  
腹の物となる。然に腹は。安閑とし  
て。亦まを食ひ。絶て我らに。謝する  
はとふし。腹何ぞ無情なるや。今よ  
里の。腹のために。發め勞せ。一た  
び腹をして。困ましむ。應し。とぞは  
る里ける

されば。足の食堂にゆゑず。手の箸  
をとらず。口の食を入る。亦やふく。  
齒の物をかむ。亦となし。目の食物  
を見せ。鼻の香をか。冷。耳の食時  
の報をきか。共。に。その發る處を  
つ。ぢ。め。ず。し。て。徒。然。し。て。兩。三。日  
を。過。ぎ。け。ま。む。身。躰。漸。つ。か。れ。て。終

に起臥する力も。おきに至れり。故  
よ。腹以まご疲まざるよ。手足まづ  
衰へた里と以ふ

愚あるか。手足等の活き。心腹  
の司る志を。知て。かくの如  
き不平を發し。恨む處の腹よ。里も。  
己らさきに。衰弱せり

汝う。此理ヲ悟ル<sub>一</sub>アラバ。我身ノ  
教育ニ苦勞シ給フ。父母及師匠ヲ  
バ。決シテ怨ミ侮ル<sub>一</sub>勿レ

第二

郊外よ。かに。雨ふ里來れり  
行人ハ東西よ迷ひ。南北よさわぎ  
走れり。中に。一群の童子ありて。樹

陰に集り。靜に雨を。さけ居多り  
 されい。學校の生徒ふして。今日た  
 まく。休暇なるを以て。師より從ひて。  
 遊歩に出たるなり  
 教師童子をかへりみて曰。むかし。  
 太田道灌と以ひ一人。狩よいで。今  
 日の如く。雨は値て。歌をよみたり。

其歌。すまぶる秀逸ふし  
 て。今も猶まきを賞せ  
 り。我も亦ふかく  
 感嘆するをゆ  
 ゑに。汝等の  
 騒ぐを宥めて茲よ  
 あり。此雨ながくは降る處からば。



志ばらくに志て。歌むべしとて。彼  
 歌を吟誦し。其意を諭しなせしめて。  
 あまけるよ。果志て陰雲漸おさほ  
 り。洗ふお如き。天色といなまたり  
 かり。その歌ハ。以そがほい。濡きざ  
 らましと。旅人の。あまよまはる。  
 野路のむらさめ

汝等。コノ歌ノコ、口ヲ。意ニ記シ  
 テ。不慮ノコトニ遇フト雖。ミダリ  
 ニ騒ギ。惑フコト勿レ

第三

兄弟の娘あり。姉ハ十歳にして。妹  
 ハ七歳よなまたり  
 姉ハ。天性順良にして。其才も亦た



ぐれた里。妹をかりしき生れなき  
ごえ。さすがに幼児の志やなるゆ  
ゑに。やゝも志れを。危き志とをな  
まよ至れり

一日。學校よりかへるみちふて。石  
につまづき倒きたるはづみに。か  
かへ持とる書物を。傍なるほ里の

中へ。なげ入れまば。大にあわて、  
志れを取んとす

姉おぞろきて。其袂をとらへ。誰よ。  
心を志り免て。我言をまけ。書物の。  
固に大切なる物なきごえ。人の命  
まいかへがたし。志の濠は。深くし  
て。大人さら。容易く此よ。入る志を

を得ず。まゝしてや。少女の分を以て。何とて書物を取らざるを得んや。家にかへらむ。妾よく父母に請て。彼書を求め得さす願ふ。今よ里後かゝる事ありとぞ。能々我身を省みて。決して危き所業をなさざらん。と諭しけむ。是より里か

こき少女なまを。忽ちして。その理を服し。悦び以て。家にかへり

此所ハ裁縫場ナリ。アマタノ少女。ナラビ坐シテ。裁手縫ヒセリ。一人ノ男兒ハ。器械ニヨリテ。縁ヲ又ヒ。今一人ハ。ヒノシヲカケ居レ

リ  
 凡衣服ノ裁縫ハ。女子ノ身ニトリ  
 テハ。缺クベカラザル業ナレバ。夕  
 トヒ其身。トミ榮エテ。親ラ此ワザ  
 ヲナサズトモ。必コレヲ習ヒオク  
 ベシ。モシ此道ニクラキ時ハ。不便  
 ナル一多カルベシ

マシテヤ。貧家ニ生ル、女子ハ。第  
 一二務メ學ビテ。生涯ヲスレ。失フ  
 コト勿レ

第四

人ふいかならば。長むる所と。長ぜ  
 ざる。と云。恥あり。我レその一事に達  
 す。と云。他人を見くだし。悔るべし

らず

志々に獅子と蚊と勝負を争ひこ  
るをかき話あり。或るとき蚊志々に  
むるひて。君の勇猛ふして。天下  
に敵なし。故にけもの中の王と  
りといへり。然ども。吾よりおれを  
看るときは。智恵ふふくして。わお

あひ手ふり。足ざるなり  
と以へむ。獅子笑て  
志るるとせは。故  
に蚊くちばし  
を尖らして。吾言  
を信ぜざれを。請ふ  
れを志るるみよといふ



此に至て獅子奮然やして大に  
以か里。汝なんぞ身よえ應せぬ。大  
言を以ださや。いざ來れ。後悔さふ  
とて。牙をならし。爪をどぎて。まぢ  
かまへとり

然きども蚊。小ふして。勇を施さど  
はるふし。蚊たち満ち耳に以里。又

その鼻に飛び入て。志ばく此きを  
刺しぬれむ。獅子頭をうぶか。耳  
をかき。大息して曰。今わき始て。た  
たかひひ。力にあらずして。法を得  
るに在る此きを。悟里と里とて。終  
に降參なした里と云  
獅子の此をば。極めてよし。さきを

おのまき強しとて。決して他人を。あ  
ふどるまきとなまき

第五

童子ヨ。汝詩ヲ作り。歌ヲ詠ム

コトヲ。知リタリヤ

以まだ志らず

然バ。汝ニ語りキカセシ

詩ニハ。五言絶句。七言絶句ナド。イ

ロクナルスガタアリ。五言絶句ト

ハ。五字ヅ。四句ヲ連ネテ。一首ト

ナシ。七言絶句トハ。七字ヅ。四句

ヲ合テ。一首トナス

歌ハ。五もト。と七文字とを。五句あ

はせて。一首となせり。その第一ハ。

五文字。第二ハ。七もト。第三ハ。五文字。第四ハ。七もト。第五ハ。七文字。合て三十一もトナリ

第一よリ。第三までを。上の句と稱へ。第四第五を。下の句と以ふ

詩ヲ作ルコトヲ。學ブトキハ。大ニ讀書ノ助ケトナリ。歌ヲ詠ムコト

ヲ。習フ時ハ。其詞タゞシクナリテ。トモニ文事ノ補ヒトナル

家を建るにハ。其地高くして。燥きたる所をえらび。又よく樹木を養ふべし。其地たかくして。かひきたる所ハ。空氣よく通ト。樹木茂リたると云。極ハ。人の心もさハヤかふ

して。たのづから氣風も高く。なまゆるくもの故に。その地を擇びて。住べきなり

第六

一日。老人。童子ヲイマシメテ曰。汝ラ。途中ヲ走り回リテ。アツサニ苦ムコトアリトモ。其マ、冷水ヲバ。

飲ムベカラズ。モシ渴シテ。堪ガタキニアラバ。少シノ間。木ノ蔭ナドニテ。暑サヲ消シテ。シカシテ後ニ。飲ムベシトゾ教ケル

童子去テ。公園地ニ至レリ。時に炎熱。やくお如し。傍をかへりみる。泉水あり。老松枝をたれ。古





杉日をおほひ。志た  
たる。水ハ苔をうる  
ほし。その清き志也。  
以ふ。慮あらず。童子  
大に悦び。老人の誠  
を忘れて。あくま  
で水をのみた。里し

が。家にかへ。里てのち。果して病を。  
乞きおほした。里

水ハ。動物植物ヲヤシナフニ。缺ク  
ベカラザル。モノナレドモ。ソノ用  
法ヲ過ツトキハ。害トナルコト。斯  
ノゴトシ。此童子。老人ノ言ヲ守ラ  
バ。何トテカ、ル病ヲウケンヤ。ス

ベテ教ニ背ク者ハ。福ヲ轉ジテ禍  
トナスコト。唯コノ水ノ害ノここニ  
ハアラザルナリ

新編 小學讀本第七畢

版權免許 明治十九年  
一月廿五日  
再版御届 同  
五月廿八日  
校正三版御届 明治二十年  
一月十七日

定價金五錢五厘

編輯者 愛知縣士族 三尾重定

出版者 東京府士族 岩田富美

出版者 東京府士族 吉澤富太郎

發賣人 本所區松井町三丁目十番地

